

# 全自者協ニュース

・全自者協ニュース/第23号/2004年(平成16年)2月1日  
・発行所=全国自閉症者施設協議会・事務局 ☎ 0593-94-1595  
・発行人=石丸晃子 ・編集人=石井 啓・津金澤 寛

## 利用者主体の競争の時代を

めぶき園 五十嵐 康 郎

支援費制度がスタートして、短期入所の利用が増えている。聞くところによると、全国的な傾向のようである。特に行動障害を伴うケースや、利用が長期化するケースが多い。入所施設が満床のためにやむを得ず短期入所を利用せざるを得ないからである。

一方で相変わらずのいわゆる売り手市場で、施設の処遇や運営に少々の問題があっても、他に選択肢が無い。倒産することはないのである。

支援費制度によって、利用者が事業者と対等の立場でサービスを選択し、事業者は競って質の高いサービスを提供する「競争の時代」が到来する筈だったが、事業者にとって、今一番の関心事はリスクマネジメントと総額人件費を抑制することである。

売り手市場の状態を変えなければ、経営のみが全面に出た低レベルの競争に終わってしまうことが危惧されるのである。

一方で、障害児デイサービスや知的障害者デイサービス等に代表される地域で暮らすための在宅福祉関連の支援費単価は到底運営不可能と思われるような低額が示された。

当法人では、地域の早期療育を担うために、自閉症療育や保育の専門家を配置して、障害児デイサービスを行なっているが、一時は閉鎖を考えざるを得ないところまで追い込まれた。

知的障害者デイサービスは、ノーマライゼーションの趣旨から、「仕事」や「余暇活動」を提供し、大人としての地域での暮らしを支える筈であるが、現在の単価では専門性のある職員を確

保することは不可能と言わざるを得ない。要するに「一時預かり」を前提にした単価設定としか考えられないのである。

利用者が多い、行動障害がある等の理由でそのデイサービスさえも十分に利用できないのが現状である。

めぶき園では、短期入所利用者も含めて、全利用者を対象に、生産活動(仕事)、療育活動、クラブ活動、余暇活動等のサービスを毎日提供しているが、それらのサービスを割愛もしくは縮小すれば、現在の3分の2程度の職員数で運営できると思われるのである。

見学者や研修生から療育や職員の質の高さを誉めてもらっても、慰めや自己満足にしかならない。経営面を考えると、自閉症や行動障害を伴う難しい人はなるべく避けて、生産活動等は応じられる人を対象に行ない、人件費を抑制することが、競争時代を生き抜く道ではないかとすら思えてくるのである。

短期入所で自閉症や行動障害を伴う困難なケースを受けて、専門性を発揮しても、難しいケースばかりが集中するだけで、極論すれば経営的には何のメリットもない。

国は入所施設は増やさない方針だが、それでは入所施設の正当な競争は阻害されてしまうのである。施設整備費を支援費に含めて、施設整備補助金を段階的に廃止し、専門性やサービスの質を担保に、施設整備を自由化し、買い手市場になってこそ、本来の利用者のための競争が生まれるのではないだろうか。

## 第十七回 茨城大会

秋の深まりを見せ始めた十月十六・十七日の両日、茨城県水戸市水戸プラザホテルを会場に、第十七回茨城大会が開催されました。

今大会は、北関東・東北プロック施設の担当で、あいの家、ひかり苑の協力により二百余名の方々の参加を頂きました。

今回の大会は、自閉症を取り巻く社会状況の大きな変化の中で、はじめに石丸会長より「新しい時代の中で自閉症者と生活を共にする全自者協会施設が、自閉症問題の正しい認識と、制度保障のための情報発信が求められ、更に自閉症の人間が、幸せに暮らせる社会にしていく為の提言をしていく機会に」と、この大会の大きな意義が示されました。

一日目の記念講演では、筑波大学社会科学系教授新井誠先生により「知的障害者の権利擁護と成年後見制度の機能」の演題で、特に自閉症者にピントを合わせてお話をくださいました。これから契約の時代の中で、全自者協会施設でも、契約や財産管理について、必

要となるであろう権利擁護や成年後見制度の利用について、改めてその重要性を実感させられた内容でありました。

午後からは、四つの分科会に分かれての研究会となりました。「より豊かな生活のための支援」を共通のテーマに、発表して下さった施設の実践をふまえ、四時間という長丁場にもかかわらず、各分科会とも時間が足りないほどの白熱した討議がなされました。そして、改めて全自者協会施設が、これまで培った自閉症者支援のノウハウに関し、積極的に地域に発信していく事が、今求められている事を確認する機会となりました。

二日目は、まず厚生労働省障害福祉課山口和彦専門官により「自閉症児・者福祉の動向と今後の展望」と題して、国の施策に関し、国が目指すところについて、具体的にお話いただきました。講演に先立ち、山口専門官の「お疲れの方はどうぞお休みください」の温かい(?)お言葉とは裏腹に、会場の方は十六年度予算の動向を絡め

てのお話に、一言一句もらすまいといった張り詰めた雰囲気すら漂っていたように思われました。

続いてのシンポジウムでは、「自閉症・発達障害支援センターのめざすもの」のテーマで、平成十四年度全国十二箇所を設置されたセンターのうち、東京・おかやま・熊本の各センターにシンポジストとして立って頂き、弘済学園第二



児童寮長三島卓穂氏にコーディネイトしてもらったのシンポジウムとなりました。内容的には、各センターの機能や他機関との連携のあり方を模式図で示してもらい、

またシンポジウム以外のセンターからも、関連した取り組みの報告がなされました。全自者協会施設は、この事業を受託、或いは受託に向けた準備をしている所も多く、今後センターと施設の協働を模索する上で、情報の共有が図られたのではないかと考えられます。このシンポジウムでは、コーディネーターの三島氏の緻密で歯切れのよい進行振りに、皆が引き込まれ、二時間という時間があっという間に過ぎていきました。

今大会を通して、いま地域社会からは、自閉症の理解と専門性の部分が求められ、ますますその役割が大きくなっていることを実感すると共に、全国の全自者協会施設が、この役割に向かって、前向きに、そして元気に取り組んでいる事を、参加者全員が実感できた大会だった様に思われます。

最後になりましたが、分科会での発表や助言、シンポジスト等の大役を、快くお引き受けくださり、大会を盛り上げて下さった会員施設の皆様に、この場を借りて、深くお礼申し上げます。

(あいの家 高松 秀彦)

## 対談

## 山崎晃資／石井哲夫

石井 先生、私たちが若いころ、「ホスピタリズム」とか「インスティテューションナリズム」ついでわかれていた、親子の接触がうまくいかないということから、問題が生じる。その場合には知的な遅れとか、人格的な偏りという言葉を使ったんですね。

前回の話ではそういう概念に該当する人かな？つて思う人は、非常に幅が広いですよ、程度の違いもあるし、一方、発達障害においても、基本的には生物学的な障害でしょうが、育て方による、つまり気脈の通じる親子もいるし、まったくもうネグレクトしてしまっ親もいる。そこでも発達の障害が生じるのではないかと。そうすると状態像からみてね、仕分けが非常に困難ですよ。ですから先生の場合でも、生育歴からとってくるんだと思うんですけども、最近、高機能の人たちと会うと、彼らはいじめに遭っている人が多

いもので、それと社会的な挫折を経験しているから、かなり社会に對して厳しい見方をして、そして抵抗感を持つている人もいるんですよ。先生の言ったような意味での、人に対しての対応をかなり意図的に使い分けながら自分の気持ちを持って、言ってみれば深いところにあるような人、示しているような人との区別が一般につきにくいと思つておられるのです。これは一般にですよ。つきにくいような状態と思つておられるんですよ。だから専門家であつてもかなり曖昧な言い方をしてしまつたり、むしろ我々のような場合には症状で判断するよりしようがないから、そこで症状で対応していくことになるんですよ、基本的にはですよ。これは私の考え方なんです、人間ていうのは、どんな場合でも、それは取戻しがつかないと考えないで、こちら側の状態によつて相手を交えるしかないだろうつて考えているんですよ。

山崎 「こちらがわ」というのは？

石井 つまり「援助者側」の。

山崎 援助者側の状態を？

石井 援助者側の考え方をです。援助者側の考え方ができるだけ深いところまで戻つても、「あなたをちゃんと信頼してるんだ」というような確信のようなものを、相手にぶつけていかなければ、要するに関係は人によつて違いはあるけれどもね、やり方はそういうことしかないんだつて僕は思つておられるんです。

ところが今の世の中はそうではないんですよ。要するに対処に困る時は此方から、何か目標を決めてそこに向けていく「形」の上で仕組みを作つてやるという、そういうやり方で対処するしか今はないんだつていうような考え方が強くなつてきている。

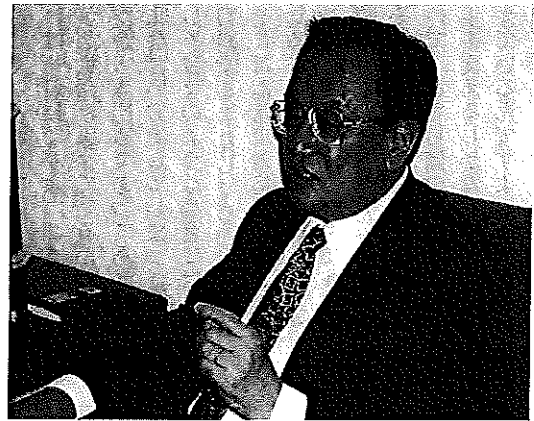
山崎 だからね、それは症状で考えるしかないつて考え方は、アメリカ精神医学界がはつきりとした態度で、従つてその概念の成り立ちだとか、精神病理だとか、心理

学的なメカニズムつて言うのを全部除外して、症状レベルで整理したのがDSM-IVですよ。今の若い先生方はそこからスタートするから、本当の心の深層が見えないつていうか、あんまり考えずにパパッと診断してやつちゃうから、ある意味では便利といえれば便利で、誰が診断しても同じになるといいながら、非常に浅薄な診断で共通してしまつていう非常に難解な面がありますね。

もう一つは全然話が飛ぶけれども、このごろ青少年の犯罪がものすごい勢いになっていて、東京都もね、「緊急治安対策委員会」なんつていうのも作られていて、その中の一部に「子どもを犯罪に巻き込ませない為提言をする会」というのが出来たんですよ。つい先週も2回目をやつたんですよ。東京都の竹花副知事が責任者でやつておられるんですよ。それで、今一番問題になつておるのが渋谷区でしょ。青少年問題では、だから渋谷区長の話の聞いたり、それから警視庁だとか東京都の学校教育部長の話の聞いてもね、とにかくシステムが一杯あつて、これ以上のはないだろうつてものはあるんだだけ

ども、連携していない。なんといつても、一番欠けるのは「大人が子どもを信じられるか信じられないか」なんですよ。そこが全然ね議論としてあがつてこないんですよ。そんなことをいうとね、今さらそんなことをいわれたらつて思つて、そんなことよりは緊急で具体性のある対策をつていなければならない、僕はそこところがなければ、いくらあちこちネットワークがはりめぐらされたつて、うまくいかないだろうと思つているんです。

発達障害の人たちに対する対応もね、昔、あすなろ学園にいらした十亀先生が、何かで言つた言葉で非常に印象にあるのが、「彼らを異常とみるのを止めたときに、はじめて彼らと関係がつくだろう」とつて言つた言葉がね、心に残つているんですが、僕はそういうようなことは非常に大事だと思つてますよ。障害のあることには間違いはないけれども、障害を越えて人と人としての関わりに共通したものがあつて、これは精神保健の原則であつてね、精神保健というのは健康な部分にいかに関与していかかだから、病的な部分にはつ



り目を向けていたつて健康な部分にかかわらなければなりませんよ。僕は如何にして健康な部分に接近しようかつて考えるわけです。彼らはそういう点は非常に敏感に見抜きますからね、そういう目で見てくれる人かどうかつてことを。

石井 なかなかわかりにくいことですが、そういう言語的なものとか、意図的なコミュニケーションつて言っていることよりも、もつと、こちら側の非言語的な自然な

姿勢というか対応をです。そういうもので相手が動くというのを、結果的にしか証明できないものなんだろうけれども。下手をすると、そういうのは特殊な人がやつているとか、名人芸とかいわれるのです。施設の職員で非常に困つた利用者や難しい出来事に、フアイトを燃やして関わる人間は比較的冷静なんです。結果的に私が見ていてうまくいくのは…さつき浅はかとおしやつたけれども、世の中で私の言う事実が通らないの中は、結局は政策全体が、形のみえるシステムづくりをすれば世の中良くなると思う人が多くて、地道にコツコツ大切なことをやつているようなところにはなかなか目を向けてくれない。そういう意味の世の中の傾向というものが、色々な問題を放置したり、望ましくないことを助長したりつていうふうに見ているんですね。歴史的な流れからみると人間というのは身近に接して、ちゃんとつかまえて、人の心がわかるように育てていけない限りは良い世継ぎができないわけで、その辺がいつも

はつきりしないまま、放つておかれたんじゃないかな？つて、ずっと言い続けてきたんですが、なかなか今の先生のようなはつきりしたことを言つてくれるドクターも少ないし、そんなことで障害を今は色々な名前をつけて呼んでいるんだけれども、我々は分類しなくても、どんな症状の人でも安定して生活すればいいんじゃないかと思つているんだけれども。学校のことと同じでしょう。

山崎 学校？

石井 学校なんかではね、例えばLDはこうするんだとかね、ADHDはこうするんだつてことを、あんまり言わなくてもね、今のよいうな人間として普通に見て付き合える人たちが多くなればつて思うんだけれども。

山崎 先生、十人の自閉症と診断された子どもがいたつて十人十様じゃないですか。自閉症はこういうふうには指導すればいいというのは大枠としてはあるけれども、一例一例に対しては、あんまりそういうことは関係ないでしょ。

石井 そう思います。最後の締めとしてね、先程の延長ですけども、精神薄弱って言う言葉よりはいいだろうといながら、いわゆる知的障害という言葉に変えてしまつて、精神薄弱の概念の中に溶け込んでいたはずの発達障害を切つたんです。知的障害という言葉です。はずれた人たちには、そこで特別な対応をしなければならぬ福祉の援助が必要で、それで施設の中でも自閉症にかなり特化して頑張ろうじゃないか！って言う施設が全国で六十ぐらいになって、全国自閉症者施設協議会というかなり大きな施設集団になってるんです。で、そういう中で私が知る範囲においては、肝心の強度行動障害とか、広汎性発達障害に関わる部分になってくると、そこの人たちが、頑張ってくれているのですが、社会的に非常にマイノリティなんです。これからの福祉の施設で入所で少数である施設の人たちが、励みになるようなことを先生からエールを送っていた。笑

山崎 励みにならないかもしれないけど(笑)。いわゆる伝統的な

いとか、今まで中心になってきた、精薄とか知的障害と呼ばれている人達を主とした施設ではもはや対応が困難だという意味で、自閉症関連の人が多く入っている施設でしよ。うちは自閉症しか入れませんなんて言っているところはないわけで、そういうところでは、むしろ、個別指導から出発していくんだと思うんですよ。一対一の関係、一対二、一対三の関係と発展していくんだと言う視点で、やるのは素晴らしいと思いますよ。それをとりあえず名称でくくらない



ちやならないから、全国自閉症者施設協議会と言っているんだらうけれども、願わくは、将来はそういうふうにいわなくてもいいようになつてもらいたいなって願っていますね。

もう一つは、今年久しぶりに夏に「檜の里 あさけ学園」に行つて、びつくりしたのは、僕の目からみればさうとう重い人たちがなんですよ、自閉症の重症度からいえば、しかしちゃんと、仕事をやっています。これはある意味で枠をね

つかり設けてやれば、彼ら・彼女たちは相当な能力を發揮することができなかつていう点で、そういうようなことが、僕はあちこちの通所施設なんかで、僕は色々なところに行つて見えますが、昔では考えられないくらい本当の意味で実績を挙げている施設が非常に多くなつてきている。是非、自信を持つてやつてもらいたいなあって思うのと、それから僕自身のことを振り返つてみても本当にこう何やつていいかわからなくなつたり、困つたなあと思つたり、どうしようかと思つたときに一番

勇気付けてくれたのが自閉症の人達だからね。そういう点では私が大手術して、その後、「先生、死なないでね」って言つてくれたのも自閉症の人達ね、私の健康を一番気遣つてくれるのも彼女たちだからね。うちの女房よりははるかに気を使つてくれている。(笑)

石井 そこはオフレコにしますが(笑)

山崎 そういう意味では、僕はとつても「おもしろい」って言い方は怒られるけど、「愛すべき人達だなあ」っていつも思うものだから、僕は子どもたちの為にはあらゆる手段を使つて良いと思つていんです。反対に、政治的・経済的・行政的なことのために子どもたちが利用されるのは、僕はものすごく嫌なんだ。だからどんな場合でも断固反対しようーと思つていけれども。

石井 ありがとうございます。



# ◆◆「三気の会」◆◆ ◆◆訪問記◆◆



九州は阿蘇山の麓の熊本県にある三気の会を訪ねた。「三気」とは、「のんき、こんき、げんき」のことで、利用者支援に必要な職員の姿勢を表した言葉とのこと。三気の会の運営する施設・事業には、全自者協加盟施設である知的障害者更生施設「三気の里」をはじめ、知的障害児施設「三気の家」、そして熊本県自閉症・発達障害支援センターがあり、それぞれの担当スタッフにお話を伺った。

## その1「三気の里」

三気の里には通所部もあり、その主任支援員である伊豆野良栄氏にインタビューさせていただいた。

Q 伊豆野さんが実際に仕事をしていく上で一番大切にしていることは…。

伊豆野 ひとつと言うのは難しいですが、利用者への関わり方で言えば、本人が「自分で動けた」「自分で出来た」と思えることを大切にしています。99パーセント介助

したとしても、1パーセントでもいいから自分で出来た感じが利用者本人の中に伝われば、本当にOKだと思います。本人が、自分でやれた感じがあれば必ず力になっていくと思います。それから、親御さんたちは、言葉のない子どもでも、ごく自然に会話をしながら育ててこられてきていますので、施設内でもできるだけ利用者と普通の言葉で普通に会話することは心がけていますね。

それから利用者支援の考え方は、それぞれのスタッフでそれぞれ、それぞれのスタツフでそれぞれ、それぞれとは思いますが、とにかくスタツフ研修で意見を出し合い、共通認識を図るようにし

り行動できる事は意識しています。急ぎ足になってくるとあまり良いことはありませんからね(笑)。

支援するスタツフにも、具体的にこうやってもらったら良いかも?とか、第三者的な見方が必要だと思えます。また、言うこととやることを一致させることは療育者にとっても利用者にとっても、大切なことだと感じています。

基本的な生活習慣として、利用者に対し「スリッパを揃えましょう」と言っておきながら、スタツフ自身が普段できていなければ論外です。スタツフが努力しないと利用者には伝えられないし、スタツフがやれていないことを利用者に求めてはいけないと思うんですよ。どれだけ、スタツフがそういう気持ちで普段から生活できているか、スタツフの生活の仕方も仕事に反映しているのかな?って思えますね。だから、この人に言われたらムカつくけど、この人に言われたら納得できるということもある訳ですよ。利用者は、スタツフのことを良く見ていますから、そういう意味では利用者は素直だし、嘘をつかない。スタツフが毎日の生活の中で模範を示すことは基本だと思っています。

Q 行動障害の激しい利用者の方のエピソードを教えてください。

伊豆野 食堂の食事状況になったら、目つきが変わり、身体が固まって、間違いない食事が吹っ飛ばすという方がいますが、「ガシャー」という音がして、他の利用者が反応して別の行動障害が起こるといことが、入居者数が多い分だけ起こりやすくなります。勿論そういう方には、スタッフが付き添い、集団との時間差をつけて対応したりしていますが、利用者自身、好きとか嫌いとか、やりたくてそんな行動を起こす訳ではなく、場面や状況・物に反応してしまいうこともあるんです。酷くなると、テーブルまでひっくり返すといったことも起こります。現在、特定のスタッフとの関係では、落ちていて食べる事ができるようになってきたので、今後は状態に合わせて、スタッフを変えていくなど、範囲を広げていくようにしていきたいと思っています。

また、今まで利用者の「自主性」に任せていたことで行動傷害に拍車がかかるケースもあり、自傷や他傷での怪我が絶えず落ち着けないといった場面もあったように思

います(そこで、今年度は、集団でまとまって活動することを試みているんです。80人全員がバラバラに活動することで絶えなかった怪我や自傷・他傷の傷跡が、集団で活動するようになってから、ぐんと減りました。利用者も活動が判りやすくなったんですかね。今、自分はどうしなきゃいけないんだとか、今はこうする時間なんだとか。もう一つは、スタッフ自身が利用者に対して行き届く目を持っていくことで、守られてきたのも大きいですね。初めは、議論もありましたが、あくまでも利用者一人一人を自傷や他傷から守るといこと、落ち着いて安心して暮らせる場所にしたこと、それらを守れずにして、利用者の生活を保障することはできないのではな

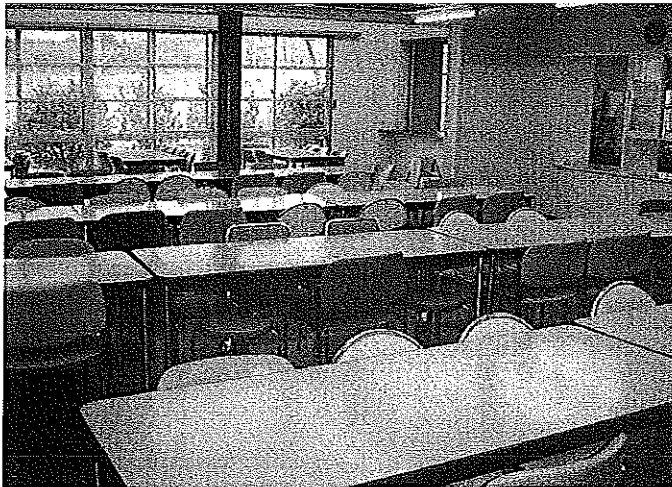
いかということですか。逆

Q 逆に集団で動くことで刺激しあつて

しまったらということはないのですか？

伊豆野 くっつけちゃいけない人はよく分かるようになりましたね。この人とこの人は、側にいたら危険だな...とか。

まず、「仕事の時間だよ」今はこれをする時」などを分かりやすく伝えたり、今やるべきことに向

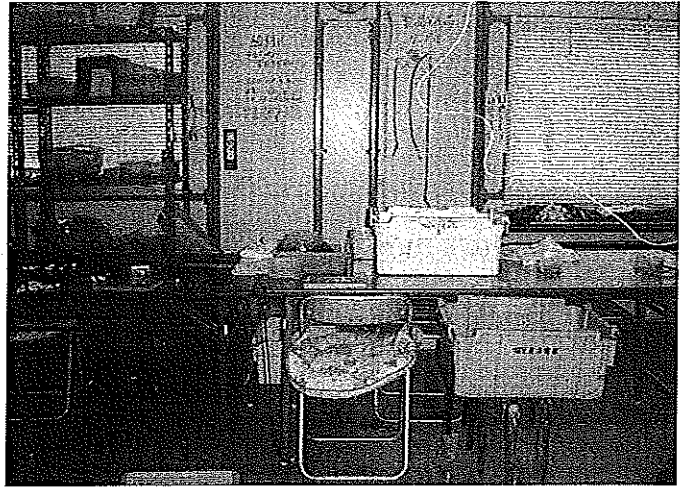


かうとか、過剰な反応をしなくてもいいように、ある程度、環境の設定を行います。

あと、大切にしていることとして作業などの「やりとり・関わり」の中で、利用者とスタッフがより関係を深くすることで、苦手な利用者がここにいるも、このスタッフがいれば大丈夫なんだと思える空間を作っているんですよ。まずは、スタッフが媒体となり、このスタッフがいれば安心だという関係を築き、それが徐々に広がっていつ、過度に反応しなくても過ごせるようになっていく。かなり配慮しなくてはいいけないですけどね。

とは言っても、全てのケースが簡単にいく訳ではなく、そのような「やりとり」をする中で、変にこじれてしまうこともあります。そんな時は、ベテランスタッフがスーパーバイスをし、そのスタッフが技法を伝えていくようにしています。

このような取り組みは、個人での取り組みだけでは難しい部分もありますので、スタッフ間で今の目標を共通認識し、チームとして機能することが必要だと思



Q そういうやりとりをスーパーバイザーがみていてスーパービジョンでできればいいんでしょけど、それだけの人的余裕って難しいでしょうから、そういう現状でどのような工夫をされているのでしょうか？

伊豆野 スタッフ間で、スーパーバイザーとスーパーバイザーとい

フ間相互において、できるだけ具体的に伝えることと、その他にも療育会議を定期的に行うことや他の施設に直接現場実習に行く等、実践を通じた研修を大事にしています。

Q 利用者支援の仕事は、スタッフラインに立つに当たってのハードルが高いですね、業務独占資

うように二分しているのではなく、グラデーションになっていゝるんで、「この人がいないから出来ない」っていうことは全くありません。ある程度スタッフの中でも、年数の問題ではなく、うまくやる人と不器用な人はいるんですね。だけど、不器用だからってやれない訳ではなく、要はどれだけ利用者に向き合いか、本気でつきあえるかどうかと思つています。やっぱり「やる気」と「感性」ですかね。三

格もないし。でも本当に求められていることは、そんな低いことではないはずだと思います。車に例えれば、運転免許を持つているからといって誰でもサーキットを走れる訳ではないというように。その辺りはいかがですか？

伊豆野 そうですね。「福祉」っていうだけで、確かに誤解して入ってくる人がいますよね。自分が癒されたいとか、優しくなりたいたか(笑)。人材についてみてみると、そういう「職員数」がどれだけいても、かえって利用者の皆さんが困ることにもなりますし、私たちも困る。ただ、人手があれば良いという問題ではないんですね。「自閉症」の方への関わりは、ヘルパーの資格を持っているからって、誰でもできる仕事ではないと思ひます。障害があるからこそ支援が必要なので、障害のエキスパートが必要なんだと思ひます。この仕事は、技術職だと思ひます。それに、誰でも出来る方法が良い方法だとは言ひ切れなところもありますよね。人間相手ですから、マニュアル通りにいかなひのが、この仕事だと思ひます。

Q 三氣の家の特色、大事にしていること、加えて須賀原先生の大切にしていることなどをお伺ひしたいのですが。

須賀原 現場職員がベテランなので私が職員から習つて、見よう見まねで毎日勉強しながらやっています。(自分は施設長だけど)自分もなるべく療育に関わり、子どもの障害や特徴や療育技法について肌で感じたいと思ひています。

故・田中理事長の方針は、「人が人として社会の一員として育つ」という理念がありました。そのことは、私も同じように考えています。これからもその理念を引き継いで仕事をしていこうと思ひています。

自閉症というのは、「十人十色なんだなあ」とここに来て、色々なタイプの子どもたちと接する中で感じさせられました。そしてこの子たちの子育ては決して容易では

## その2 「三氣の家」

三氣の家では、施設長の須賀原翠氏にお話を伺った。



ないと。ですので私たちは、この施設で療育をする...というだけでなく、親御さんが子どもときちゃんと関わられるようになるということも、伝えていかなければならないことだと思っています。その子にとつて良い方法を得て、育つてくれたらいいなあと思っています。

Q 健常の子の親御さんと発達障害の子の親御さんとは、何か違いは感じられますか。

須賀原 以前、保育園に長年勤務して感じていたことですが、障害というか、保育園の集団の中にいれば子どもの発達の遅れは見えてきます。その時に私たちの方から保護者に「ちよつと発達が遅れていますよ」と、伝えることは難しいことでした。健常児の親には「遅れを認めたくない」というのが一つあって、懇意にした小児科の先生が園医でしたので、その先生に相談したり、言語治療の先生が月に一回来ていたので、そういう先生からの助言で、どこかで検査を受けてみたらどうでしょうかと助言したり。お母さんにとつても不安な部分もあるかもしれないけれども、子どもさんの為には早

いうちに、どうもなければ、それはそれで検査が出来たんだからよかつたんじゃないかって、色々すすめてみましたね。でも、なかなか難しいものだと感じました。

Q 親御さんのケアというか子育ての支援は、どういう形で行なわれているのですか？

須賀原 連絡ノート、電話、個別訪問のほか、月に一回は保護者を対象とした学習会を行い、子どもの療育について話し合う機会を作っています。

そこで、子どもの表す問題行動や個別で行う学習や言語指導のことなどを含めたケアをしています。緊急時のケースとして、三気の家や学校では上手く生活できても、家庭に帰ってからのこだわりが強く、生活が大変でどうしたらいいでしょうか...と電話がかってきたりもします。



そんな時、事業の一環として緊急時での対応を行うこともあります。その子に限らず、だいたいここに来ての間、子どもたちは、大人が配慮して対応したり、環境を整えることでうまく生活できていますけれども、家では自分をもろに出してしまいますから。通園施設ですが、24時間見守っていく姿勢はもっています。

普段の活動の他にも泊まり保育も年に四回ほどやっています。その中で普段、日中の療育の中では見えてこない身辺処理の面を確認したり、後日、お母さんたちにごの子にはどういう支援が必要かという話の話し合いをしています。また、このような機会には、普段利用することの少ない公共機関を利用し、多くのことを経験させるようにしています。

あとは、母子通園を月に一回程度行っています。お母さん方に日頃、子どもたちが頑張っている様子を見てもらったり、具体的な職員への対応の仕方などを見てもらっています。そして、お母さんが実際に子どもさんと関わる様子を見て、具体的な助言を行っていくようにしています。このような機会をもつことで、家庭での子どもの接し方、過ごし方が少しずつ変わってくるケースも多くあります。

三気の家の療育は子どもの社会性、コミュニケーション能力、自己コントロール能力などの発達を支援することを目的に、様々な方法を取り入れて行っています。

## その3「支援センター」

支援センターでは、相談員の田邊剛政氏と浦田裕之氏が応じて下さった。

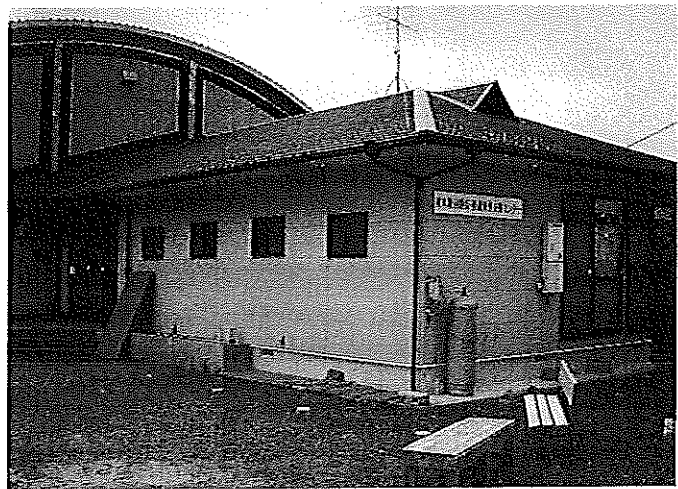
Q 三気の会に委託された支援センターとして期待されていることというのは、どういう風に感じていらっしゃいますか？

田邊 やはり最初から、療育というものは期待されているみたいなんですけど、最初は療育出来るようになってから始めようという形で動いていたんですけれども、実際に活動し始めると、センターが丸抱えするような療育は範囲も狭まっていくし、対象とする人たちも狭まっていくというところで、そうすると県下全域をカバーするというのは難しいなと言うことが今実感としてあるんですけれども、そういう関係で地道ですけれども、その方が所属されている機関ですね、幼稚園、保育園、小学校、そういったところに向向って行って、先生方に障害の特徴を知ってもらったり、対処法を知ってもらった

りというような資源を作っていないことにはどうしようもないというのが現状にあるんで、今熊本では草の根作戦といってるんですけど、下から一つずつ大事に育てていきたいと思いますという形での取り組みというのが主な取り組みになってますね。

Q 緊急のケースというのはいらつしやらないんですか？

浦田 現在、24時間の緊急対応ということはやつていません。日勤の中で必要な相談を受けているのが精一杯というところがあつて、実際には難しいのが現状です。緊急時だからといって全然面識のない、行動障害の激しい人が「今日、これからお願いします」とポンと入つてこられたとしても、職員の配置(実際に対応できるのか)という問題もあります。実際には家庭などで目の前で行動障害を起こされていて、問い合わせがあつたケースは数件ありますが、後日(翌日など)なるべく早いうちに来所してもらい、必要に応じて対応(その後定期的な療育支援への移行、附置施設のショートステイなど)を行いました。



Q 自閉症の啓発活動というのは、どんな感じでなさつていらつしやいますか？

浦田 今年度は、定期的な研修会として、発達障害児者などの方に直接関わられる先生方、職員の方を中心に対象者別(学校、幼稚園、保育園、施設、保健師など)に分けて行っています。あとは、このような対象者別の定期的な研修会だけ

でなく、学校や施設などの職員研修の中で依頼をされるスタイルで、出前出張研修みたいなことを行っています。夏休み等は結構依頼が多くて八件ほど学校などにお邪魔して、研修会を行いました。内容は自閉症・発達障害についての診断基準や特徴、関わり方のコツなどをお話しています。

田邊 学校の校内研修は大体毎月されているようですが、その中に人権擁護とか福祉関係の研修会もされている。そのときに自閉症や発達障害について話をしたいという依頼がある。関係が取れた学校とはそういう風にながりが深く持てるなあとという実感があります。

浦田 校内研修後に、各先生方が直面されているケースの質問があったりするんですが、「じゃあ今度改めてその方を見に行きましようか」というふうに各ケースへの



具体的な訪問相談に移行することもあります。まあそうやって実際のケースを通して、具体的な部分を先生方につなげていければと思っています。県下には七百校ほどの小中学校がありますが、現在までにどれくらい回ったか。まだまだ数パーセントですが、まあ今のところ地道ですがそうやっていこうかと思っています。

また我々が直接、そのケースに関わって実際に子どもさんに変化が見られれば、職員の方も支援セ

ンタレを信頼してくれませぬ。そして、その過程でどうやって対応すればいいの？って、こちらの対応に「食いついてきた人」とは、その後もいい関係が保てます。そういう方は実際に伸びますし、私も定期的に訪問しています。この一年で十回以上訪問した学校もあるんですよ。

例えば「今回の訪問は、食事についてお願いします」というようにテーマを絞って依頼されることもあります。そこで、実際に先生との普段の取り組みをうかがい、また、実際に私たちの取り組みの様子を見てもらい、ちよつとしたコツ、工夫する点、配慮する点を取り組み後に(時にはリアルタイムで)説明しています。そしてその助言に基づいて、後日しばらく活動の中で取り組みんでもらって、うまくいかなかったところを次回また相談してもらおう、というようにしています。いくつかの学校ではそういう方法で、少しずつですが、いい方向に変わってきていることを実感しています。まさに「草の根作戦」ですね。

Q 先ほど直接ケースを握えることはなかなか難しいというお話があったのですが、抱えざるをえなかったケースの事例などはありますか？

田邊 自傷、他傷、家庭内での行為が激しくどうしようもないというケースはありましたが。

浦田 その方は、養護学校の高等部の方でしたが、家庭ですごいパニックを起こし家族を脅かしているというか。家族も本人の言動に脅えて生活しているという状況でした。そこで、少しでも家庭での生活が楽になるようにと療育支援と附置施設のショートステイを併用し、行動面の改善を目標に取り組みました。取り組みの中で少しずつですが、改善されてきたと思います。しかし、まだ支援センターや三気の里という特定の場面だけ、家庭や学校ではまだ自分のペースが強く、周囲を困らせているのが現状です。

できれば、こういうケースに関しても実際に所属されている学校の先生方とも協力しながらやっていけるといいなと思っています。これからですね。

Q 相談には、親御さんから、ご本人からというのがあると思うんですけど、実際に相談を受けてらっしゃる中でどういった「傾向」の方が多いというふうにお感じになられていますか？

田邊 一番多いのは不適応行動になりますかね。その時の対処方法ですね。先生方の主訴はそちらに傾いてしまいませんか。親御さんもそうなんですけど、親御さん自身がどう関わっていいかわからないか？もう一つ手前の部分ですね。自閉症と診断された子どもに対して自分はどうのように関わって行けばいいのか？そういうところでの「お尋ね」とかです。あとは療育をしなくてはいけないって、すぐに思われる方も多くて、どこか療育機関はありませんか？って、そういうところですかね。

浦田 将来のこととか、成人の方や軽度発達障害の方も多く相談を受けるようになってきました。私たちは今まで、どちらかというと中度、重度の方を専門にやってきたところがありますので、多少戸惑いながらも、社会の中



で生きるためのスキルの獲得など、必要なことはやっていかないといけないな...と思いい対応しています。

田邊 高機能の方やアスペルガーの方が自分でっていうのは少ない

です。一回来られた方で、自分の思いを親とかですね、周りの人に伝えられないときは、支援センターにメールを送ってもいいよって伝えてはいるんですけど、つながりを持つということですね。ですから「今、電車で、茶髪の人が隣に座って嫌だ」とかいメールが入ってきたりとか、ありますけど、それは全部お受けする形でですね、一週間に一回くらいはお返事を書く形で。一つ一つのやり取りとすると大変なんです。永遠に続いていきそうなんです。今は継続して相談と言う形でお受けしていますが、いずれは、支援センターがもつことには限度があるだろうことは想定はしているんですけど、それは所属するところが決まればセンターとのつながりは一度切つて、どちらかと言うとそちらの所属されているところとつながっていくというような形でいきたいなと思つていますけれども。

Q 最後に三気の会が受託している支援センターならではの、という

アピールがありましたらお願いします。

田邊 色々な療育技法を勉強しているところですかね。一人一人に合わせた療育を考えられる、そういった技術を身につけていると自負していますし、そういった自信みたいなものがないとセンター業務は成り立っていかないと思っていますね。ニーズに応じて対応できますよということがあるかなと思います。

浦田 対応できる範囲がわりと広いのではないかな...と思います。結局、ある程度乗れている子はいいと思いますが、乗れていない子が結構いて困っているのが現状だと思います。まあ「困難な子」でもやれるところがあるのかな？ こういうケースにはこういう対応法があるなど、いくつかの考え方や手法はもっていると思います。そして、利用者の評価が得られるよう、早い段階で結果を出せるよう意識して取り組んでいます。

あとは、熊本の支援センターは体育館を持つているのが売りですね(笑)。「センターに来れば体育館が使い放題」って(笑)。

「三気の会」の自閉症支援は、幼児通園にはじまって成人の入所・通所と幅広いニーズに対応してきた実践の積み重ねが、支援センターの事業受託に結実していると感じた。またそれを支えているのが、専門性を持った質の高い支援職員であるということは、正に「福祉は人なり」を体現しているとも感じさせられた。

